

グローバル化と社会的包摂性～宮台真司氏講演「ナショナリズムの行方」より

10月14日6時半より北海道大学W203号室にて、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」の主催で、宮台真司氏による「ナショナリズムの行方」と題する講演が行われた。宮台氏といえば90年代にサブカルチャー研究で論壇を牽引したことで知られているが、近年は経済学や政治哲学の理論をも駆使しつつ政府の経済政策や雇用政策に対して具体的な批判および提言を行っている。

氏はマルクスの「資本論」の論点の中で重要であったのは、経済的利益のために社会を犠牲にすると経済もまた立ちいかなくなるという指摘であり、そのために資本主義社会において多くの資本家は「社会に気をつかう」ことが肝要だと認識してきたとする。グローバル化が国内の経済格差の拡大や企業倫理の低下を引き起こしてきたのは、社会で問題が生じたとしても外国人労働者の導入や、外国への工場の誘致などをとおして、問題を回避することが可能となったからであるとする。つまり、それによって企業は社会に気を使う必要がなくなったのであり、社会が疲弊するのは当然の帰結だとする。

宮台氏はグローバル化という現象自体は既に不可避としつつ、今後は「グローバル化によって脅かされないような社会をつくる」ことが必要なのだとし、そのために「社会の包摂性」を高めることが必要だと論を展開していく。現代日本で生起している多様な犯罪や社会不安の背景には、アブソーバー(吸収装置)としての社会の包摂性がないことが問題として横たわっているとする。こうした問題を打開していくために、社会を大きくする、つまり相互扶助的で包摂的な社会を再構築していくことが重要だとし、そのためには何かへのコミットメントが絶対必要となってくるのだと氏は言う。とはいえ、今のところ全人類へのコミットメントというのはいずれ、事実的な問題として我々が実際に使うフレームは宗教であったり、ナショナリズムだったりする。どちらにしても、自立的に発せられるような「よすが」を作ることが大切なのだと氏は指摘している。

こうした宮台氏の問題提起を受けて、講演会の後半は北海道大学スラブ研究センター長の岩下明裕氏および同大公共政策大学院准教授の中島岳志氏を交えたトークショウが行われ、フロアからの質問やコメントを取り入れつつ活発な議論が展開された。特に、コミットメントの対象としてのナショナリズムの妥当性については、各論者の立場の違いが明確となり、聴衆にとっては興味深い展開となった。岩下氏は、大きな物語としてのナショナリズムやあらゆる二分法に対しては、その（コミットメントの対象としての）危うさを指摘するとともに、地域に暮らす人々の身体性に寄り添い、より具体的で日常的な利害や感覚に落とし込むことによって、二分法の軸や境界自体をつねに揺さぶりずらし続けていくことが必要だとした。

また、宮台氏の提示した社会的包摂性という概念あるいは方法については、中島氏から

は包摂に内在する排除の論理の問題をどうするのか、岩下氏からは(共同体つながりが強く残る地方の目からみれば)社会的包摂性の欠如に原因を求めるという問題構成そのものが、都市部にしかあてはまらない論理なのではないか、という本質的な問いがそれぞれ出された。これに対し、宮台氏は、伝統的な共同体や絆から排除されている人々を（あるいは伝統的な絆を疎ましく思っている人々をも）取り込めるような枠組みを作っていくことが今後の課題であるとした。

今回の講演および3氏によるトークショーでは、社会的包摂性の「よすが」としてのナショナリズムの妥当性については、その是非ではなく、多様な立場の論者によって様々な角度から議論が展開されていくこと自体が意味をもつのであり、そうした場がもたれること自体が社会の成熟度を高めていくことにつながるということが示されたのではないだろうか。また、グローバル化が引き起こす問題群に抗するための方策を、どうにかして見出していなければならないという宮台氏の真摯な問いかけは、我々に問題意識を共有させる力を持つとともに、氏の今後の研究の展開についての希望を抱かせるものでもあった。このように、各分野で論壇を牽引する気鋭の論者たちによる熱の入った議論は、学生や研究者のみならず一般の参加者の方々にとっても大いに刺激的なものとなったことだろう。



(宮本万里、GCOE)